

## 50年イスラーム思想を研究して

松本 耿郎

**松本** 松本耿郎です。東長先生がそういうことを発案されたと思うのですが、この会にお招きくださりましてありがとうございます。イスラーム思想を研究して50年にもなるわけですが、その間、色々と考えたこと、経験したこととか、そういうのを好き勝手にしゃべってよろしいというふうに自分では解釈しています。別にそういうふうに彼が言ったわけじゃないのですが、たぶん、そういうふうに好き勝手にしゃべったっていいのだろうということで、取り留めのない話をこれから1時間やります。どんな話をするのかということにつきましては、10項目に分けた講演計画みたいなのがお手元にあるかと思いますが、そういうのを取り上げて、お話ししていくということです。その通りになるかどうかわかりませんがね。

初めに、私がどうしてこのイスラーム思想を研究するようになったのかというと、18歳、つまり大学に入学する以前からそういうことを研究しようという気になっていたんですね。なんでそうふうになったのかというのは、家庭の環境といいますかね、本棚に祖父が残した歴史の本なんかがいっつか転がっていて、そういうのを子供の時に眺めていて、歴史の本って地図がついていますからね、その地図で西アジアの方を見ると、まったく空白になってる。こんな馬鹿な話はないんで、きっと誰かそこに人が住んでいて、人が住んでいる以上は、何かしゃべったり何か考えたりしているのだろう。ところがそれが全然伝わってこない。これは由々しい問題だと思っていたんですね。ちょうど私が物心ついて、色々新しい知識を収集する頃の1955年にアジア・アフリカ会議があって、これからはアジア・アフリカの時代だというふうな機運が、社会のある分野でみなぎっていたことも影響していると思いますけれども、そっちの方の文化や歴史だとか、そういうのを勉強したいなという気持ちが強まっていたんですね。そんな関係でそういうのを研究するとなると、誰について研究したらいいのかしらと考えました。たまたまその時、早稲田大学の松田壽男先生という東洋史の大家と言われてた方——東洋史といっても中央アジアから西アジアにかけての幅広いものですが——の本が目に入った。先生は歴史地理学的な研究をやっているので、その先生のところに行ったらいいのかしら、というので早稲田大学を選んだんですね。慶応大学に前嶋信次先生とか、井筒俊彦先生とかいるっていうのは、田舎(松山)の中学高校の学生だった私は知らなかったんです。ただ、松山におりました時に、松山商科大学、今は松山大学という名前の大学になってますけれども、八木亀太郎先生という先生がいらして、この先生はルーミーの研究でとても業績を上げられた方ですね。ジャラルッディーン・モウラヴィーですね。その先生からときどき、そういう話を聞いたこともあって、なんとなく西アジア、イスラーム世界の思想を勉強したいと思い始めたのがきっかけだと思います。

東洋史という学科に入って、東洋史の勉強をするんですけども、あんまり東洋史の勉強っていうのは、人がどういうことを考えていたのか、何を感じていたのか、そういうことをあまり話題にしないので、物足りないなと思いました。その人がどういうことを考え、どういうことで喜び、どういうことで悲しんでいるのか、そういうことがわかるようなことを教えてくれる本や文献はないかしら、というふうに思って東京に出てきて、ある本と出会うわけです。当時は今は違いますからね、古本市場なんてそんなものないですし、ネットで探すことも出来ませんので、神田から中央

線沿線の古本屋とかずっと探してました。たまたま、阿佐ヶ谷の南口にあった古本屋さんで、井筒俊彦先生がお書きになりました『アラビア思想史』という題の本を見つけて、それが非常に琴線に触れたと申しますかね、まだ18、19の子供なんですけども、一生懸命それを読んで、こういうことを勉強したいと思いました。それにしても、たしか昭和17年か16年に出ている本ですけれどもね、私の生まれる3年くらい前にこんな素晴らしい本を書いた人がいるんだ、どうしよう、これはえらいことだと、そんなふうにして、イスラームの思想・研究をしたいと思ったんですね。

それで早稲田大学の先生に相談したら、そういうことを研究するんだったら慶応大学でやっている人がいるからその人に相談しなさいと言って紹介してくれたのが、もう退職されましたけど、牛田徳子先生という、アリストテレスの研究で色々優れた業績を上げた先生です。その先生が当時、ちょうどアリストテレスとイスラーム哲学、イブン・シーナー——あの当時はイブン・シーナーと言わなかったですね、アビチェンナって言ってましたね(笑)。イタリー風に訛ったラテン語でアビチェンナって彼女が言っていたのを未だに記憶しておりますけれども——そういうイブン・シーナーの研究をしている人がいるので、その人と相談したら、「イスラーム哲学を研究するのは色々な外国語を勉強しなきゃ出来ないことなんで、やると大変ですよ」と警告をしてくれたんですけれども、そんなことは全然おかまいなしにそのまま続けることにしちゃったのですね。それからしばらくして、牛田先生の方から連絡があって、「カナダから井筒先生が帰ってきて、授業をするからそれに出てみたら？」という紹介がありました。早稲田の先生から牛田先生へ、牛田先生から井筒先生へと、玉突き現象が起こったんですね。それがきっかけで井筒先生に習い始めて、それが4年間続きました。当時、4年間井筒先生は慶応とマギル大学の兼任ということで、行ったり来たりしていて、日本にいる間は慶応大学で教えて、日本にいない時にはマギルで教える。日本にいる間に井筒先生にイスラーム哲学、あるいはイスラーム神学、そういった本を読んでもらっているうちに、もう抜けられなくなって、深みにはまってしまった。それからずっと今日に至っているというわけです。

井筒先生がそういったことを研究してらっしゃった頃、井筒先生ご自身はイブン・シーナー以降のイスラーム哲学——特にこれはシーア派の世界で展開していくわけですがけれども——に非常に興味を持たれて、とりわけ、サブザワリーという人が書きました『シャルヘ・マンズーム(形而上学的韻文注釈)』という本を研究してらして、後期アビセンナ哲学、イブン・シーナー哲学に関心を強くもっていらしたんですね。

## イラン留学の時代

そういう影響もあって、イスラーム哲学などを研究するんだったらイランに行くのがいいのかしらって思ったのです。たまたま、1969年の頃に上智大学で中世哲学会があったんですけども、そこで井筒先生が公開講演をしたんですね。2人先生が公開講演をしたんですけども、井筒先生ともう一人丹下先生という鹿児島大学の先生がデカルトについてお話をなさっていたのを憶えております。井筒先生はその時、イブン・シーナー以降の特に逍遥学派哲学、マッシュアーイーの哲学ですね。これの発展の系譜をお話ししてくれました。井筒先生というのはある意味、ストーリーテラーで、非常に面白いものだという印象を聞き手に与えるのがとても上手な先生でしたね。それでその先生のお話を聞いて、そんなに面白いんだったら研究しないでいられようかと思って、私もイランに行って勉強しようということで、ペルシア語もろくに出来ないのにね、イランに行ったのです。私が留学許可をもらった行き先の大学はフェルドウスィー大学でした。これが正式な名前なんです

けども、通称はマシユハド大学——ホラーサーンの中心地にあるマシユハドという町にある大学です——、ここの大学のイラーヒーヤート、神学部とでも訳すのでしょうかね、そこの客員研究員ということにしてもらって、マシユハドに留学することになりました。行く前にペルシア語の文法を勉強しているんですけど、最初は全然、役に立たないわけですよ。生のペルシア語に触れた経験なんて日本にいたときはほとんどないわけですから、その当時はね。今はそんなことないとは思いますが。行っても全然話にならないっていうので、1年くらいテヘラン大学の外国人コースという、ペルシア語を集中的に教えてくれるコースに登録して、そこでペルシア語を勉強して、その課程が一応終わってから、マシユハドに行きました。

そしたらイラーヒーヤート(神学部)にアーシュティヤーニー(Jalāl al-Dīn Āshṭiyānī)という先生がいらして、この先生について色々なことを勉強することになりました。アーシュティヤーニーという先生のことは皆さんご存知かどうか、私わからないんですけど、非常にたくさん本を校訂して出版してらっしゃいます。『イラン神智学者著作精髓精選』(*Montakhabāt az asrār-e ḥokamā-ye elāhiye Īrān*)という4巻本の分厚い本を校訂して出したり、あと他にもモッラー・サドラーの著作など色々な校訂本をたくさん出版されたりしている方です。非常にたくさん仕事をしている人ですね。亡くなってしまったからあれなんですけど、たくさん仕事をし過ぎたと思います。アーシュティヤーニー先生の校訂した本に関しましては、いろいろミスエディションが多いというのでとても有名で、まあ、困ったなと思ってるんですけど(笑)。アーシュティヤーニー先生が病気をなさっていた関係上、最終的なチェックをご自身で出来なくて、イブラーヒーミー・ディーナーニー(Ibrāhīmī Dīnānī)という現在テヘラン大学の先生をなさってる人——もう退職しているかな——、彼に任せちゃったんですね。何を任したのかというと、イブン・アラビーの『叡智の台座』にジャンディーが注釈した『叡智の台座注釈』(*Sharḥ Fuṣūṣ al-ḥikam*)っていう有名な本をアーシュティヤーニー先生の名前で出しているんですけども、実質上は、編集責任はイブラーヒーミー・ディーナーニーです。これがね、パリ大学のショドキーヴィッツ(Michel Chodkiewicz)も言ってるように、アッセフォーティーヴか(笑)、めちゃくちゃ間違いがあるっていう、そういう代物になっちゃってるのですね。もういっぺん校訂し直した方がいいと思います。ただアーシュティヤーニー先生ってのは、アンリ・コルバン(Henry Corbin)が、モッラー・サドラーの再来というふうに評して方です。

井筒先生のイスラーム研究のスタンスとアーシュティヤーニー先生のイスラーム研究のスタンスっていうのは全然異質なものです。アーシュティヤーニー先生の場合は、まったく自分自身がイランの伝統的神秘主義思想を体現していて、そのために研究しているっていうことです。どういう研究がいいのかっていうのはいつも当時、井筒先生のところで一緒に勉強していた岩見〔隆〕さんなんかとよく議論してたんですけど、一方に、研究対象と同一化しちゃうようなもの、堪能する能力みたいなものを持たないと本当の研究にはならないというような立場と、他方、井筒先生みたいな客観的な比較哲学、あるいは言語哲学という観点からこの対象を分析していくという方法とがあって、どっちもそれなりに素晴らしいと思います。とりわけ、アーシュティヤーニー先生の主著というふうに言ってもいいと思いますけども、『哲学と神秘哲学の観点から見た存在』(*Ḥastī az nazar-e falsafe va 'Erfān*)っていう非常に良い本があります。読んでない方はぜひ読んでください。この図書館にも入ってると思いますけども〔編集部注：アジア・アフリカ地域研究研究科で所蔵〕。ペルシア語の本ですけどもね。この本なんかはいわば傑作と言ってもいいと思いますね。

ところで、私が大学に入ったのは1962年なんですけれども、その1962年というのは、フランスのルイ・マッスイニョン(Louis Massignon)というハッラージュという神秘主義者を研究した人が

亡くなった年なんです。そのマッスイニョンの研究ってのがまさしく、研究対象と自分が同化しちゃう研究ですね。それと色々な意味で実践的なこともマッスイニョンはしたわけです。それまでハッラージュというのは断片的にしか知られてない人だったんですけども、彼はハッラージュを文字通り甦らせた。ハッラージュはご存知の通り、922年に異端宣告を受けて死刑になっちゃった人です。ハッラージュの作品を通じて靈感を得たマッスイニョンは、それから1000年後に私が甦らせるのだというので、ハッラージュの研究をして、1922年に有名な『ハッラージュの受難』(*La Passion d'al Hallaj*)という本を出版して、まさしく甦らせたんですね。それくらい同一化しちゃっているのと同時に、情熱を込めた研究をしておりました。そういうようなことが出来ないといスラーム思想の研究ってのはやっても本物じゃないんだとか、いや、そんなのはまた別な次元の話だとか、友達と色々議論して——未だに決着を見ないんですけども(笑)——、そういうことがありましたね。

さっき、アーシュティヤーニー先生をコルバンが「モッラー・サドラーの再来」って呼んだという話をしましたけど、モッラー・サドラーという人物はイラン・イスラーム哲学の世界ではめっちゃめっちゃ尊敬されている人です。色々な本でも紹介されておりますけれども、非常に大切なモッラー・サドラーの著、『4つの旅』(*Asfār arba'*)は、内容が非常に多岐にわたって、色々なことが書いてある本です。それを上手く総合的に理解して、人にまで教えることが出来るというレベルに達した人は、『旅』を教える先生』(*Modarres-e Asfār*)というふうに呼ばれるわけですが、ほとんどそういうことが出来る人はいない。私がイラーヒーヤート(神学部)に留学した頃に、その学生達が「ほんとうにモッラー・サドラーを人に教えることが出来るのはイスラーム世界でたったひとりしかないんだ」と言うんです。「誰? アーシュティヤーニーじゃないの?」「あんなもんじゃない」って。「誰?」みんな怖がって名前を口にしないんですね。でもとうとう「アーヤトッラー・ルーホッラー・ホメイニーっていうんだよ」って教えてくれた。聞いたことのない名前でしたからね、アーヤトッラー・ルーホッラー・ホメイニーって一体なん何者だろうって。アーシュティヤーニー先生に、「アヤトッラー・ルーホッラー・ホメイニーって一体どういう人ですか?」って訊いたら、「わしの先生じゃ」と教えてくれました。実質上、彼はその当時、イランにすることが出来なくて、イラクのナジャフに居を移して、そこから色々な反国王運動を指導していました。だから、非常に政治的な活動をした人です。でもその人のバックグラウンドというのはモッラー・サドラーの哲学に立脚しているということですね。

アーシュティヤーニー先生はその当時、ホメイニーのことを非常に尊敬しておられて、優れた人だというふうに言っておりました。イランとかイスラーム世界とかは全体的に男性優位社会、男性の権利がとても強い社会です。特に神学校というのは男ばかりが集まって勉強している、そういう世界ですからね。そういう世界は往々にして言葉遣いが良くないです。ああいう男性優位社会、それにまた輪をかけるように部族社会だとかね、要はマッチョ社会ですね。「ホメイニーが度胸があつて男らしい」ということを、非常に下卑た表現で言うんですね。でもそれはペルシア語の世界ではありうる表現です。ペルシア語を知ってらっしゃる方がいらっしゃると思いますけれど、アーシュティヤーニー先生は両手でなにかを抱えるしぐさをして「ハーエアシュ・インカドル・ゴンデ」と言うのです。女性の方も大勢いらっしゃるので、ちょっと恥ずかしいんですけども、ハーエってのは金玉のことです、睾丸。つまりこの表現は直訳すれば「……金玉……」なんですけど、度胸があるという意味でそういう言い方をするんですね。そういうふうに言っ、ホメイニーのことをとても尊敬しておられましたね。それで、ホメイニーが目指した革命が起こって、それ以後、アーシュティヤーニー先生は、体力的にも衰えますし、色々国王時代に築いていた人脈というのを失ってし

まった関係上、非常に凋落してしまいます。革命後にアーシュティヤーニー先生に会った時に、ホメイニーのことを以前ずいぶん高く評価されていましたが、今はどんなふうにも思っているんですか？って聞いたら、あの人は昔持っていたガダーサト (qadāsāt) ——気高さというのか神聖さというのかな——を無くしてしまった、非常に残念なことだと言っていました。とりわけ、その革命によって大勢の人が殺されたりしたということが、アーシュティヤーニー先生にとっては残念至極だったんだと思います。

アーシュティヤーニー先生が、色々ホメイニーについては問題があるけれども、彼の書いた『導きのともしび』(Miṣbāḥ al-hidāya) はなかなかいい本だとおっしゃったので、どんな本かしらと思って読んでみたんですけども、それはようするに神名論ですね。asmā' ilāhīya について書いてあって、とりわけワラーヤの問題が扱われています。ワラーヤというのは中々日本語には翻訳しにくいけれど、これについてはちょっと思い出があります。井筒先生が *Taoism and Sufism* っていう英語の本を書いていらして、あの中でワラーヤのことをただ単に字引通りに *saintship* っていう訳語に翻訳していますね。本人も非常にそれについてはちょっと問題のある訳だと思っていたので、私に「君はワラーヤはどう訳すんですか？」と質問をなさるわけです。それはまあ、*closeness to God* っていう訳しか出来ないんじゃないですかねって答えたのです。*saintship* はちょっとね、あるレベルの理解で、もっと深い意味がワラーヤにはありますから、そういった訳語に基づいて、イブン・アラビーが展開しているワラーヤ論を理解していかなくちゃいけないんじゃないかと思っています。

要するに神名論というのは、イスラーム存在論の見取り図みたいな形になっております。それで、それをベースにいわゆる存在一性論 (*waḥdat al-wujūd*) っていう考え方が作られているわけですね。この存在一性論っていうのが、先ほどからお話ししております、イブン・スィーナーの哲学をどういう観点から解釈するのかということに非常に関係しているわけです。イブン・スィーナーという人は、色々なことに好奇心を持つ人で、存在という事実——これは概念じゃないですから、事実としてしか呼びようがないと思うので、私は「存在という事実」という言い方をいつもしているんですけども——、存在という事実をイブン・スィーナーは、それにはこういう側面もある、ああいう側面もあると色々な側面を列挙していくんです。ある場合には本質に対してくつついていく——「偶有する」——そういう側面があるって言ったものだから、西洋中世哲学のほうで非常に物議を醸したという側面があります。それから存在を取り上げて考える場合に、意識のもとに、第一義的に現れてくるような事実でもあると言います。そこから彼が面白い例えとして、「空中人間の説」というのを作り上げているわけです。

存在と本質の関係はファーラービーという人が最初に、このふたつを二項対立的に捉えて提示しているわけですけども、それに基づいて、存在と本質の関係がどうなっているのかというのを考えた時に、どっちがどうっていうのをイブン・スィーナーは言っておりませんね。存在にはこんな面がある、こんな面がある、こんな面があるっていうふうには言っておりますし、本質に存在が偶有する——くつついて行く——っていう側面もあるというようなことも言っておりますけども、かといって本質のほうが存在に先立つのかといえば、はっきりしたことは言わない。イブン・スィーナーのそういう形而上学的な体系を、「存在の根源性」(*aṣālat al-wujūd*) に基づいて、解釈するんだという人もいれば、いえいえ、そうじゃなく、あれはやっぱり「本質の根源性」(*aṣālat al-māhiya*) に基づいて解釈するんだ、すべきだという人達もおります。

有名な人は、近代の人ですけども、マーザンダラーニーっていう人がいた。『アブー・アリー・スィーナーの哲学』(*Ḥekmat-e Abū 'Alī Sīnā*) という本、20巻くらいの本ですかね、そこでは、「本質

の根源性」という観点でイブン・スィナーの哲学を説明しているのですが、でもアーシュティヤニー先生はそうじゃない。さっきも申しました『哲学と神秘哲学の観点から見た存在』っていう本の中ではやはり、「存在の根源性」の観点でイブン・スィナーは読んでいけなかつたと言ったわけです。このアーシュティヤニー先生の解釈っていうのが、現代イランではほぼ主流だと思いますね。

ところで、アーシュティヤニー先生の個人的な話をすると、この先生は生涯独身で終わりました。イスラームでは独身をあまり奨励しなくて、結婚しないというのは変な人と思われちゃうので、みんな結婚しますね。アーシュティヤニー先生にエジャーゼ(免許皆伝書)を書いて渡したアッラーメ・ガズヴィーニーっていう先生がいて——この先生は、私がイランへいった時にはもう亡くなられて、おりませんでしたけれども、イスラーム世界で最後に魔法が使える人だという伝説が伝わっている人でありました——、その先生なんか結婚して16人も子供がいるという素晴らしい人でした。ところがその弟子の免許皆伝書をもらったアーシュティヤニー先生は、結婚もしないで生涯独身で、最期はひとりで孤独な生涯を終えられたということです。亡くなったのは今からもう5、6年前なのかしら、その時お葬式に参加出来なかつたので、お墓参りだけでもしておこうと思って、この1月に行きました。アーシュティヤニー先生は、マシュハドのイマームレザー廟の第9広場の中の1室の敷居の下に埋められております。サフネ・ノ(第9広場)にアーシュティヤニーの遺体が埋葬されておりますので——みなさんあまり縁がないからいなくてもいいと思われるかもわかりませんが——、イマームレザー廟に行くことがあったら行ってみてください。あそこには、イマームレザーの遺体の他に、アーシュティヤニー先生の遺体も、他の色々な有名な人の遺体も埋められているんです。

彼は名前がアーシュティヤニーっていうだけあって、元々は、現在のイスファハーンの近くのアーシュティヤーンっていう村の出身ですが、マシュハドに長く住んでいたんですね。マシュハドのあたりで非常に有力な一族に、ハーメネイ家っていうのがあります。そのハーメネイ家の姻戚関係にあるお嬢さんと、アーシュティヤニー先生とが結婚したらどうかっていう話があったらしいのですが、それをアーシュティヤニー先生は断っちゃったんです。これはさっきから言っておりますように、ああいう社会で結婚を断ると、断られたほうは非常に面子を潰されるといいますか、とても良くないのです。それで、アーシュティヤニー先生とハーメネイはずっと仲が悪かつたといえます。これもその、父系制社会、男性中心社会、そういった弊害のひとつだと思います。彼はそういうことでずっと独身を通して孤独な最期を遂げた。ほんとうに可哀想だと思います。

## 中国スーフィズム

ところで、私の連れ合い(編集部注:松本ますみ先生、敬和学園大学人文学部教授)が中国イスラームの研究をしているのですが、彼女が今から十七、八年前に雲南省にたまたま行ったのです。そこで馬聯元の『シャルフ・アッ＝ラターイフ』(Sharḥ al-laṭā'if)という本を見つけて持って帰って、これ何を書いてあるのって言うわけです。何を書いてあるんだろうって読んでみたら、要するにワフダトル＝ウジュード(存在一性論)の本なんです。中国でも存在一性論の伝統があったっていうことで、少しそういう研究をするようになりました。

その中で、19世紀の雲南の回民叛乱の最高指導者になった——なったというか祭り上げられちゃった人ですけど——馬復初、本を見ると馬徳新ぼとくしんですけども、馬復初という人がやはりそ

の系統の人なんですけれども、馬復初のスーフィズムやイルファーンの著作を読んでも、その読み方が、非常に面白い。特にアズィーズ・ナサフィーの書きました『最果ての目的地』(*Maqṣad-e aqsā*)という本を自分で漢文に翻訳していますけれども、その翻訳の仕方が非常にユニークだと思いました。本文に書いてないようなことがいっぱい書いてある。文章の大意は変わらないんですけども、馬復初が「こうあらまほし」っていう方向に文意を発展させていってる。アズィーズ・ナサフィー自身はそこまでは考えてなかったかわかりませんが、平和と非暴力主義、生命尊重——今日でいうところの民主主義の原理ですね、そういうものを非常に大切にしている。少なくともこの馬復初が翻訳した漢文の『漢譯道行究竟』という題の本の内容に関して見ますと、そういうところが非常に強く現れているので、こういった可能性がイスラーム思想の中にはあるんだということがわかって嬉しくなりましたね。

ちなみに、中国イスラームの知識人のことを回儒と呼びますね。1937年頃からこういう名称が出来ちゃったわけですけど、桑田六郎(1894-1987)っていう東洋史の先生が作った言葉ですね。漢文でもってイスラームの思想を表現しているんで、そういうふうに呼んでいるんですけども、私は感心しませんね、回儒という呼び方は。そもそも、回と儒というのは根本的に違うところがありますよ。と申しますのは、馬復初が非常に重要な『大化總歸』<sup>たいかそうき</sup>っていう本を書いていますけれども、あれは要するに、イスラームの非常に重要な思想である来世、死後の復活を説いたものです。最後の審判を終えて、復活をした時に初めて、この世界そのものがハッキリと良くわかるようになりますよと、いうことが説明されているわけです。儒はね、儒教の方はそういうことを一切言わない、それが儒教の精神でしょ？なのに回儒っていうふうには呼ばれたら本人達は非常に迷惑だろうと思うんですけどね。私は出来るだけ回儒なんて言葉は使わないようにしておりますけれども、中国の研究者も、便利だと思ってどんどんこの言葉を平気で使っているんですね、無神経に。困ったものです。

話を戻すと、この馬復初の研究をしようと思って、色々な本を読んだりして、この夏も雲南省に遊びに行って、馬復初のお墓を訪ねました。でもなんか修理中なんですね。残念ながら。キチンと出来上がったらまた見に行こうと思うんですけども。今、中国共産党支配下で宗教というものがかなり厳しく取り締まられている関係上、そういうところに外国人が行くのを非常に好まなくなっちゃってるんですね。宗教管理局の人に許可をもらわないといけないというふうに言われて、雲南大学の姚繼徳先生<sup>ようけいとく</sup>がいろいろ骨折ってくれたんですけど、それがまたとんでもないお答えなんです。管理局が言うには、「馬復初のお墓に行くのはいいけれど、村に寄っちゃいけませんよ。」お墓は村はずれの丘の上にあるのに、どうやって村を通らないでお墓に辿り着くことが出来るんですか？

そういうような変な経験をしましたけれども。昆明のイスラーム教学院の馬院長さんが一緒に誘って来て、そこまで行きました。墓詣でが済むと時間が遅くなったので、もう一気に沙甸<sup>さでん</sup>まで行きました。沙甸というのは、中国でコーランを翻訳した馬堅先生<sup>ばけん</sup>という、みんなが尊敬している、北京大学のアラビア科を作った先生が出たところなんです。その馬堅先生の出た沙甸という街では、実は文化大革命が終わる直前くらいの1975年に、大虐殺事件——沙甸事件——がありました。沙甸の街のイスラーム教徒たちがわかってるだけでも900人殺された。実はもっとたくさん殺されたらしいんですけど。人民解放軍が街を取り囲んで、七日七晩に渡って街に入って行って、シラミ潰しに人を殺してまわったという恐ろしい事件があったんです。そんなことがあっちこちに文化大革命の時代に起こってるんですけども、この沙甸に関してだけは、いろいろ人々の要望が強かったということもあるし、イスラーム教徒の人達の努力が実ったのでしょけれども、慰霊塔が建ってるんです、街外れの丘の上ですね。900名の人々の名前がそこに刻まれているんですね。人民解放軍とは

名ばかりで、人民に銃を向けたということでもって非常にみんな怒ってるんですね。北京のイスラーム教の研究者の林松先生っていう人がその慰霊塔の碑文を書いております。「七日七晩に渡って妖魔が跳梁した」と書いてますけども、ほんとうに酷い事件だったようですね。そんな関係上、なんとしてでも自分たちの文化というものをまた復興させるという意気込みで、去年沙甸に中国で一番でっかいイスラーム教の礼拝所(チンチェンアー)(清真寺)が建てられています。ものすごくでかいものです。みんな見せたがるのね、こんなの作ったんだぞ、こんなの作ったんだぞって言って喜んで見せたがるんですけども、すごく立派なもので、とても中国とは思えない、東南アジア風の礼拝堂が建ってる。その礼拝堂に色々な人の写真とか貼り付けられていて、写真の中に馬聯元の写真もあります、高哈吉(カオハッ)と言われるだけあって、随分背が高い人だなというのがわかりますね。そういう経験をこの夏しました。ちょうどイードルフィットル(断食明けの祭)に当たって、とてもイスラーム教徒の人達が元気になって喜んでる時期だったものですから、あっちに連れて行かれたり、こっちに連れて行かれたり、1日に2回宴会をやったり、そういう楽しいというかお腹一杯になっちゃう経験をしましたけれども、色々な人の動きがあって、その中から色々な文化というものが生まれてくるんだなと思いました。この昆明にね、会社経営をやってる人がいて、そこにサラール族という(チンハイ)青海省の田舎のほうに住んでいるトルコ系のイスラーム教徒の民族がいるんですけども、そのサラール族の人が集団で出稼ぎに来て、仕事してる。それでイードルフィットルのお祝いしているのですね。イスラーム教の院長先生がそこへも行きましょうっていうことで行って、ご馳走になって。「ご馳走になったんだから、あんたもなんか説教しなさい」って言われて、下手くそなアラビア語で説教をしましたけれども。そういう経験をしました。大体、1時間位しゃべったから、ここまでにしましょう。

\*\*\*\*\*質疑応答\*\*\*\*\*

**東長** それでは引き続き、質疑応答の時間に入りたいと思います。まず私からいくつか質問させていただきます。私は、存在一性論の神秘哲学研究からこの道に入りました。私自身はアラブのエジプトで勉強したんですが、先生の学ばれたイランの研究における伝統について3点ほど伺いたしたいと思います。

1点目として、イランにおけるイスラーム哲学、イスラーム神秘主義研究のありかた——アーシュティヤーニー先生が、伝統の中に自分が生きて、伝統を自分が体現しているんだというのがその一例だと思いますが——と、それから欧米や日本における研究のありかたの間には、当然違いがあると思うんですけども、思想研究のありかた、目指しているものに、どういう違いがあり、それぞれにどういうメリットやデメリットがあるのか、教えていただければと思います。

2点目ですが、私自身が大学に入りました時には、もうイラン革命が起こっておりましたので、イラン革命後のイスラームしか知らない。先生ご自身はイラン革命の前に留学なさって、その後もイランに何度もいらっしゃってますので、パフラヴィー朝下、つまり革命以前のイランにおける学問のありかたと、革命後のそれがどう違うのか、というのを教えていただければと思います。特に私自身が気になっていますのは、イルファーン(叡智学)——イブン・アラビーの存在一性論とスフラワルディーの照明哲学、イブン・シーナー流の逍遙学派哲学、それにシーア派の神学が混ざったものと普通言われていますけれども——についてです。革命前のパフラヴィー朝のシャーは非常にそれを宣揚していました(愚民政策に使ったんだという批判もあったと思いますが)。一方、革命後にイラン・イスラーム共和国のトップになったホメイニーは、先ほどお話にありました